

2. 木津町岡田国神社の大般若経について

田中淳一郎(技師)

はじめに

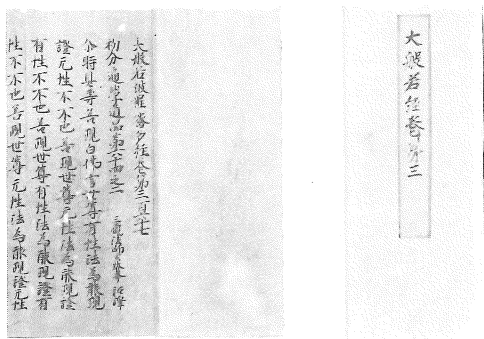
南山城地方には、中世にまでさかのぼるような大般若経は、丹波・丹後に比べると、残存している例が少ないように思われる。^(注1)そのうえ、そのなかでも詳細な調査が行われているものも少ない。

今回、木津町岡田国神社に所蔵される、鎌倉時代を中心とした大般若経を調査する機会を得たので、ここにその概要を報告する。^(注2)

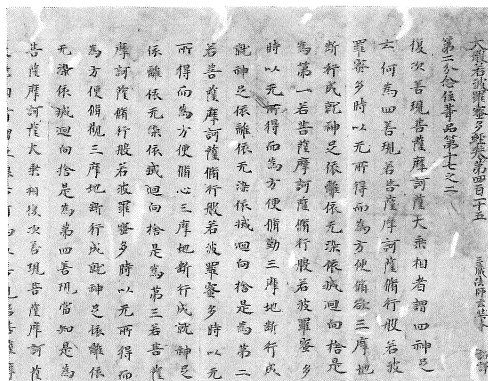
1. 岡田国神社大般若経の概観

相楽郡木津町大字木津小字大谷に鎮座する岡田国神社は、江戸時代までは天神社と呼ばれた古社で、木津郷の鎮守社として崇敬を集めている。本社に鎌倉時代の奥書を持つ大般若経が所蔵されていることは、以前より知られていたが、^(注3)近年の木津町史編さん事業のなかで、改めてその存在が注目された。^(注4)

この大般若経は、現存するもの514帖で、折本装とされ、江戸時代中期に作成された6個の櫃に納められている。法量は、表紙で縦23.8 cm、横9.6 cmのものを主とし、界高は、19.7 cm前後のもの、20.4 cm前後のもの二種類が混在する。界巾は、いずれも1.8 cm程である。櫃には、「初百」「貳百」等と記され



表紙と第367巻 巻首



第415巻 巻首

ており、元来巻次順に納められていたものであるが、調査時点では混乱していたので、第1～100巻を「初百」の櫃、第101～200巻を「貳百」の櫃というように、巻数順に納め直した。なお、かつては各10巻ごとに帙に納めていたようだが、現在帙は破損し別置されている。

経文は、第11～20巻のみが室町時代の版本であり、他はほとんどが鎌倉時代の写本である。ただし、第415巻に限っては、書風が異なり、さらにさかのぼる可能性がある。奥書のあるものは144巻で、そのうち書写年代がわかるものが36巻ある。年号は、建久・建暦・建保・嘉禄など、鎌倉時代初頭に集中している。しかし、のちに見るように、本経はもともと一具のものではなく、この時期に数箇所書写されたものが、のちに取り合わされて600巻とされたものであろう。

木津郷にもたらされた時期はよく分からないが、中世末から近世初頭にかけてと思われる。上津の御霊神社の経蔵に納められていたが、有名な正徳2年(1712)の木津川大洪水にあい、破損した。そのうち天神社(岡田国神社)に移され、木津郷民の手による修復を経て、現在ある形とされたものである。

以下、奥書をたよりに、本大般若経の歴史

をたどっていききたい。なお、中世分の奥書については、『木津町史』史料編Ⅰに翻刻収載されているので、あわせて参照していただきたい。(注5)

2. 鎌倉時代の写経

本大般若経は、そのほとんどが鎌倉時代の写経である。

最も古い奥書を持つのは、第367巻で、建久6年(1195)3月28日に書写した旨を記す。その前後の第364から370巻も、同筆と認められる。

ついで、建暦元年(1211)書写の第21, 30両巻である。21巻は「専司」、30巻は「円海」と筆師の名前が知られる。また、22, 24, 26, 27各巻も、同筆である。

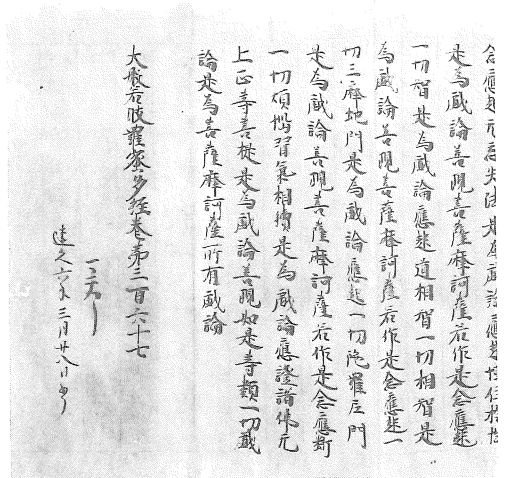
また、第229巻一卷のみが建保7年(1219)書写のものである。

鎌倉時代のもので注目すべきなのは、第420～490巻, 532, 559巻である。これらは、奥書から、嘉禄元年(1225)の5, 6月に、東明寺源長が願主となり、聖縁が書写したものであることが知られる。東明寺は、第559巻の奥書に、

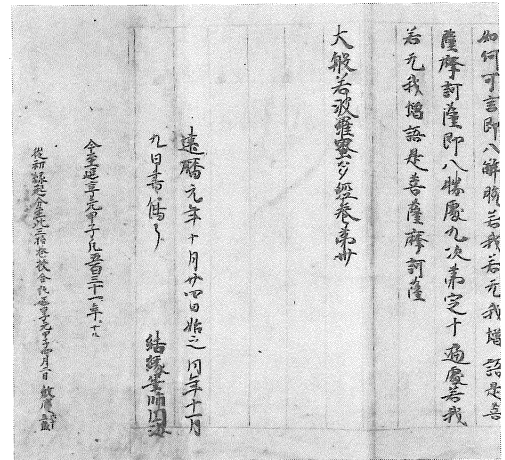
山城国相楽郡賀茂郷内東山辺東明寺之、とあることから、加茂町兎並にあった燈(東明寺のことと知られる。^(注6)東明寺の名の見える資料としては、もっとも古いものである。筆者聖縁については、文暦元年(1234)12月28日付の「海住山寺禅衆等連署起請文案」に禅衆の1人として名の見える、「僧聖縁」のことと思われる。^(注7)

東明寺関係分について、巻数順に奥書の「交点」を加えた日付を表1に示した。校合作業に要した日数が知られ、たいへん興味深い。

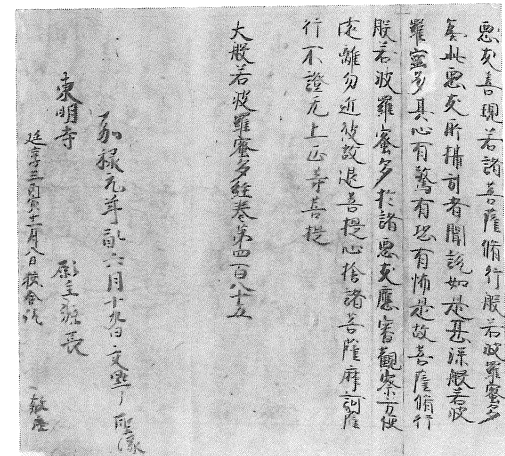
第528巻に、安貞2年(1228)5月の奥書があり、以上が鎌倉時代の紀年を有する経である。東明寺分を除いては、書写された場所は不明である。



第367巻 奥書



第30巻 奥書



第485巻 奥書

表1 東明寺經の巻数と奥書日付

巻数	奥書日付	巻数	奥書日付
419	5月12日	453	6月3日
421	5月22日	455	6月3日
422	5月23日	456	6月3日
424	5月23日	457	6月4日
428	5月23日	460	6月
429	5月25日	471	6月15日
435	5月26日	472	6月15日
437	5月29日	482	6月17日
438	6月1日	485	6月19日
440	6月1日	490	6月19日
452	6月2日		

3. 南北朝・室町時代の経

第10, 47, 152, 185, 191, 194各巻には、正平8年(1353)6月に、大般若経を讀誦した旨の奥書がある。たとえば、第10巻には、

右奉讀誦志者為当社春日白山部類眷属法
樂之并当寺興法利生也

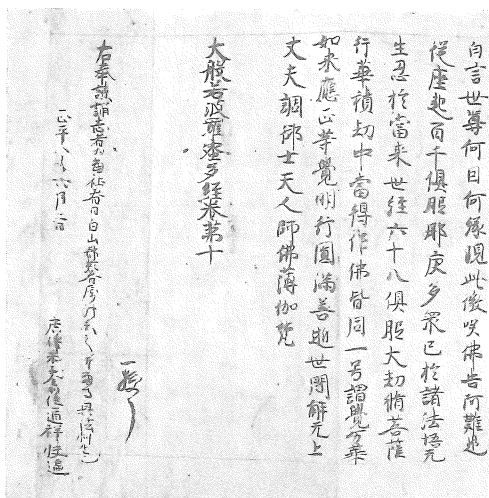
正平八年六月二日 広沢末子金剛位道
祥快遍

とある。ここで注目されるのは、「正平」という南朝年号が使用されていることである。このころ、南北朝の内乱は、北朝の足利尊氏

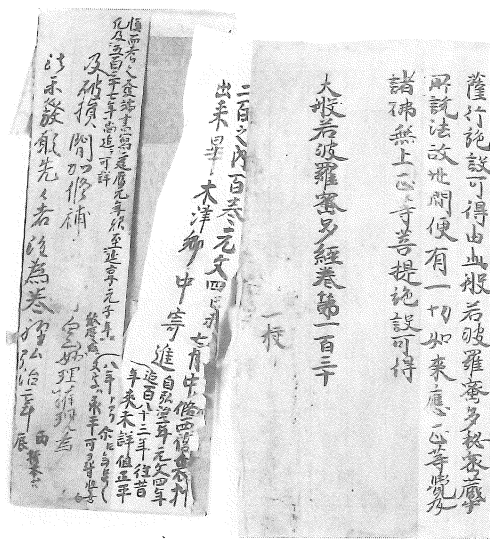
・義詮と、南朝の足利直冬、楠木正儀らの争いとなっており、まさにこの正平8年6月には、南朝方が勢力を盛り返し京都に入っている。そして6月9日からは、朝廷でも「正平」年号を用いるという時点にあたる。そういった激動の時に讀誦された大般若経ということも興味深い。既に6月2日に「正平」を使用していることから、讀誦の場所として南朝の影響下にあった寺院を想定できるのではないだろうか。

その寺院について考えてみよう。快遍は、「広沢流末子」と自称していることから、真言宗広沢寛朝の法流を引く僧侶である。寺院も広沢流の寺であろう。また、この寺は、春日、白山両社を鎮守社としている。これらの条件に合致する寺院を木津近辺に求めると、大和の忍辱山円成寺が浮かんでくる。円成寺は、広沢流忍辱山流の寺で、現在国宝に指定されている鎌倉初期の春日堂と白山堂を鎮守としている。^(注9)

これらのことから、本大般若経の前半200巻までの部分は、南北朝期には円成寺にあったものと考えていだろうか。南山城に残る数少ない南朝年号を有する遺品として、注目されるものである。^(注10)



第10巻 奥書



第130巻 奥書

第130巻には、弘治2年（1556）に大般若経に修理を加え巻子本から折本に改装した旨の奥書があり、第145巻にも、弘治3年の修理奥書がある。第130巻の奥書中には、「白山妙理権現」と見えるので、修理が行われたのは、円成寺でのことと思われる。

室町時代の書写奥書としては第207巻と第409巻に、永正3年（1506）に般若寺（現奈良市）で書写した旨が記されている。

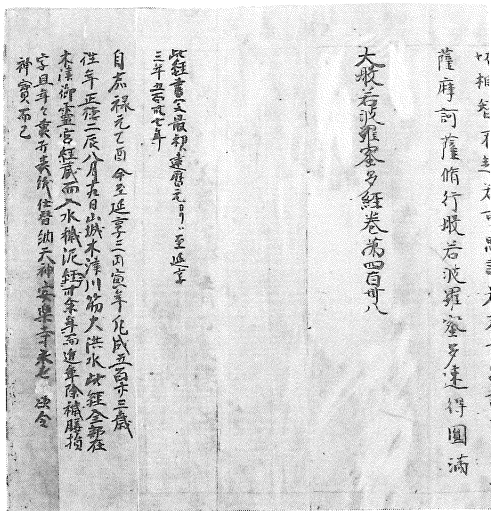
4. 江戸時代の修理について

以上みてきたように、本大般若経は、鎌倉時代前期以後に数箇所て書写されたものが、木津郷で取り合わせられ、600巻揃いとされたものである。木津郷にもたらされた時期はよくわからないが、おそくとも17世紀末までには、木津郷の大般若経として、上津の御霊神社に奉納されたようである。^(注11)

第438巻の奥書の追筆は、次のように記す。

往年正徳二辰八月十九日山城木津川筋大洪水、此経全部在木津御霊宮経蔵、而入水穢泥経_ヲ卅余年、而近年除穢膳損字、且年々裏打表紙仕替、納天神安楽寺

すなわち、正徳2年（1712）の木津川大洪水のために御霊神社経蔵にあった本経は水につ



第438巻 奥書

き汚損した。30年たって、ようやく汚れを落とし、裏打ちや表紙をやり替えて、天神社の神宮寺安楽寺へ移した、と言うことである。おそらく、洪水を避けるために、川縁の御霊神社から高台の天神社に移したものであろう。

この大般若経の江戸時代の歴史は、洪水の害を受けることから始まった。続いて、修理の跡をたどっていく。

元文4年（1739）7月には、修復が始まったようである。第130巻の奥書に、

二百之内百巻、元文四己未七月中修覆裏打出来畢、木津郷中寄進

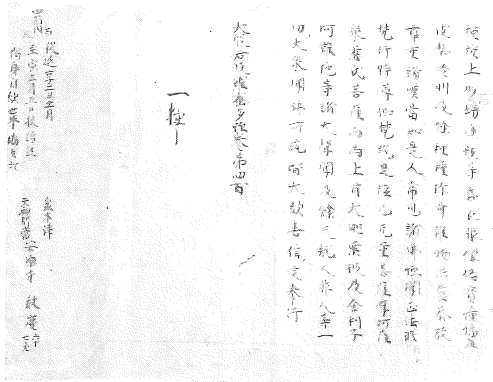
とある。「木津郷中」が修復費用を寄進していることに注意したい。この元文4年は、次項に見るように現在の収納櫃が作られた年でもあり、ようやく木津郷の人々がさしもの大洪水の惨過から回復し、大般若経の修理を始めるゆとりができたことを示しているのだろう。

寛保2年（1742）11月には、木津郷五ヶ村を勧化し、「衆人施入」をもって修復したことが、第4櫃の蓋裏墨書によって知られる。

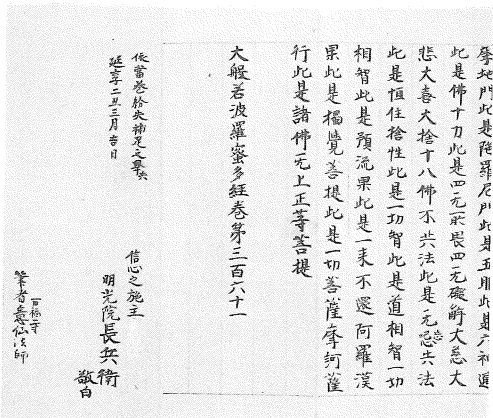
延享元年（1744）になると、天神社神宮寺安楽寺の教慶が、第1巻より順に校合をしていった経過がたどれる（表2）。第600巻を欠くため、終了した年月が不分明であるが、3年にわたる歳月を費やして校合を続けた教慶の努力には、頭の下がる思いである。多数の巻に、1行から数行におよぶ補修や補筆が認められるが、これらは教慶の校合の跡を物

表2 安楽寺教慶による校合年月

巻数	開始年月日～終了年月日	典拠
1～30	～延享元 4. 2	30巻奥書
101～200	延享元 5. 25～同 11. 17	200巻奥書
201～300	延享2. 9. 1～同 11. 10	300巻奥書
301～400	延享2. 11. ～延享3. 3. 5	400巻奥書
401～500	延享3. 某～同 12. 29	500巻奥書
451	延享3. 6. 23	451巻奥書
480	延享3. 11. 2	480巻奥書
485	延享3. 11. 8	485巻奥書



第 400 卷 奥書



第 361 卷 奥書

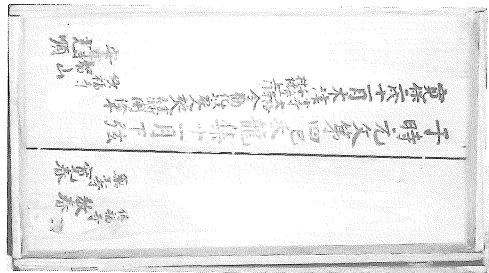
語っているものである。

第 361 卷は、延享 2 年 3 月に、紛失していたものを、万福寺の意仙法師が写経して補なったものである。

このように、元文から延享に至る修理によって、現在みられる形となったものである。ただ、このときの修理によって、汚損していたらしい奥書部分などが切除されたり、他巻の奥書との錯簡が生じたりしたものがあつことは惜まれる。

その後、欠巻となった第 155 巻、第 156 巻、第 518 巻は、天明 3 年（1783）に木津村の松下養元によって補なわれている。大般若経を維持していこうとする、木津郷民の姿が感じられる。

5. 経櫃



上 経櫃正面、下 第 4 櫃蓋裏銘文

経を収納する櫃は、6 個で、いずれも幅 56.8 cm、奥行 31.0 cm、高さ 44.0 cm の外形で、蝶番によって深さ 5 cm の蓋を付ける。脚は、すべて現在は欠失している。櫃各面に墨書があり、作成年代等が知られる。順に見ていこう。

各櫃とも、正面には、

御靈	小寺村
宮什物	大寺村
天神	千童寺村
	枝村
	上津村

とあり、木津郷五ヶ村として、氏神の両社に奉納したものであることがわかる。

背面には、

大般若経	山城木津郷
	初百内

とあり、「初百」の部分が、順に「貳百」「參百」「伍百」「六百」となる。第 4 櫃は欠失している。

蓋の表には「大般若 六百巻」とある。

蓋の裏には、紀年その他の記載がある。

第 1, 4, 6 櫃には、

于時元文第四己未龍集十一月下弦
とある。元文4年(1739)にこれらの櫃が
作成されたことを示す。

さらに、第4櫃には、

小寺 大路
寛保二戌十一月木津千童寺 令勸化、
枝村 上津
伝福寺教春
葉王寺寛春
裏打 周備畢 妙福寺智山
以衆人施入 表紙 安楽寺光順

とあり、寛保2年(1732)に、木津郷を勸
化し、その施入銀で、裏打や表紙付与などの
修復を行ったことが知られる。ここに名前の
見える4ヶ寺は、いずれも現在は無い寺院で
あるが、伝福寺は千童寺、葉王寺は大路、妙
福寺は小寺にあった寺で、安楽寺は天神社の
神宮寺であったが、ともに明治初年に廃寺と
なった。^(注12)

第2櫃には、

天明三卯年改之者也

阿州徳嶋瑞尊徒 祖快

とあり、おそらく元文4年に作成した箱が破
損したために、天明3年(1783)に新調し
たことがわかる。松下氏による補写と関連し
たものであろう。

第3、5櫃の蓋裏にはなにも書かれていな
いが、他の箇所筆跡から、元文4年のもの
と指定される。

おわりに

以上、年代を追って岡田国神社蔵の大般若
経をみてきたが、この経は南山城の歴史とと
もに歩んできたのである。中世においては、
寺院の經典という色彩が強かったが、近世に
なると、木津郷民の大般若経としての性格が
非常に強く表われてくる。それは、大般若経
とその転読が村の繁栄と安全を願って行われ
るようになることとも関連している。そして、
破損した大般若経を修理し、守り伝えてきた

のが、木津郷に住む人々の努力であったこと
は、忘れてはならない。

(注1) 京都府文化財保護基金『京都の美術
工芸』南山城編(1979)、乙訓・北桑・南
丹編(1980)、中丹編(1981)、与謝・
丹後編(1983)の各編概要等参照。

(注2) 調査は、1986年7月16、17両日に、
木津町役場で実施した。調査者は、木津町役
場町史編さん室森元文子、京都府立総合資料
館黒川直則、京都府教育庁文化財保護課田良
島哲の各氏と田中である。なお、調査後当館
に寄託をうけた。

(注3) 佐藤虎雄「正覚寺と洪水供養碑」
(京都府編『京都府史蹟名勝天然紀念物調査
報告』第10冊、1929)

(注4) 木津町『木津町史』史料篇I 1984

(注5) 同上書。なお、同書は編年体という
性質上、年紀のない奥書は載せていない。ま
た、『木津町史』史料篇II(1986)、III(1987)
を含めて、近世分の奥書や箱書は一切掲載さ
れていない。補うため、本稿の末尾に近世分
の奥書を掲げた。市町村史の史料編のあり方
として、典籍の奥書等や金石文をどう取り挙
げるか、積極的に議論していかなければなら
ない。

(注6) 当館『燈明寺の文化財』1986

(注7) 竹内理三編『鎌倉遺文』第7巻 4717号

(注8) 『大日本史料』第6編参照

(注9) 平凡社『日本歴史地名大系30 奈良
県の地名』1981

(注10) 南山城には、金石文を含め、南朝年
号を持つ資料はほとんどない。このことは、
もっと注目されてもいいことだと思う。

(注11) 木津郷は、大路・小寺・千童寺・枝
・上津の各村で形成されている。

(注12) 「相楽郡千童寺村伝福寺廃寺ニ付口
上書」「相楽郡大路村葉王寺廃寺ニ付口上書」
「相楽郡小寺村妙福寺廃寺ニ付口上書」い
ずれも明治6年3月10日付(京都府教育委員
会『東寺観智院金剛藏聖教目録』21 1986)

〔第三〇卷〕

從初緣起分至此三拾卷校合訖、延享元年甲子四月二日 教慶六十

〔第一三〇卷〕

一校了

〔追筆二〕

『二百之内百卷元文四己未七月中修覆裏打出来畢、木津郷中寄進、

自弘治二年元文四年迄百八十三年、往昔年来未詳、但正平八年トアリ

尙トモ年号之文字、承平可尋 性善』

〔追筆三〕

『慎而考之発端書写建曆元年缺、至延享元子年ニ 凡及五百三十七年、尚追テ可詳、教慶白ク』

〔追筆一〕

『及破損間、加修補□ 白山妙理権現為法樂矣願先々者雖為卷經弘治二年丙辰折本サル』

〔第一五五卷〕

奉書写上来所記先亡追福為並某臨終正念往生耶

昡天明三癸卯年七月日

大日本国城州山城相樂郡

木津村松下養元敬白

〔第一五六卷〕

就大般若經大破、伝福寺住租快禪師為本願乞十方檀越之助勢、加

於修覆者也、雖為予遇毫助筆之、伏願一天四海太平風雨順時五穀成就万民豐樂、殊ニハ庄内安全除災與樂慎祈之処也

尙天明三癸卯歲仲秋十三葉 大智寺住持小比丘玉泉拜写

〔第二〇〇卷〕

式百内百卷、延享元甲子從五月廿五日至十一月十七日奉誦誦繕損

字擬悉地円滿助業而已 教慶

乃至教界普施

〔第三〇〇卷〕

三百内百卷、從延享二丑九月朔日至十一月十日補一校、

木津天神別当 安樂寺教慶

〔第三六一卷〕

依当卷紛失補足之畢□ 信心之施主

延享二丑三月吉日

明光院長兵衛

敬白

万福寺

筆者意仙法師

〔第四〇〇卷〕

一校了

〔追筆〕

『四百内百卷、從延享二丑十一月至寅三月五日校誦訖、独身自炊世事暇久故、泉木津天神別当安樂寺教慶 六十七老』

〔第四三八卷〕

此經書写最初建曆元ヨリハ 至延享三年五百卅七年

自嘉祿元乙酉今至延享三丙寅年凡成五百廿三歲

往年正徳二辰八月十九日、山城木津川筋大洪水、此經全部在木津

御靈宮經藏而入水穢泥、經ヲ卅余年、而近年除穢ツク損字、且年々

裏打表紙仕替、納天神樂寺永世欲令神宝而已

〔第四四〇卷〕

再校

至延享三年寅凡五百廿三年 木津安樂寺 教慶

〔第四五一卷〕

延享三年寅六月廿三夜校読了

〔第四八〇卷〕

延享寅十一月二日校読畢、廻此功德以奉謝四恩耳 教慶

〔第四八二卷〕

右經卷者、相樂郡岡田国神社奉収而、天下泰平国家安全祈可乎者

也

〔第四八五卷〕

延享三丙寅十一月八日校合訖

教慶

〔第五〇〇卷〕

延享三年某月ヨリ 至十二月廿九夜再校読 教慶六十

〔第五一八卷〕

大般若六百卷之内

奉書写上來所記先亡追福為並 某臨終正念往生耶

天明三癸 卯年七月日

大日本国城州山城相樂郡

木津村松下養元敬白

大般若波羅蜜多經卷第一百五十五
奉書寫上來所記先亡追福為並 某臨終
正念往生并
天明三癸 卯年七月日
大日本国城州山城相樂郡
木津村松下養元 敬白

乃至為備十八佛不共法故雖行般若波羅蜜
羅蜜多而不見般若波羅蜜多亦不見般若波
羅蜜多名亦不見菩薩摩訶薩亦不見菩薩
摩訶薩名亦不見諸佛亦不見諸佛名唯正
思求一切智智吾現是菩薩摩訶薩猶行般若
若波羅蜜多於一切法善達實相謂達其中
元淨元淨
大般若波羅蜜多經卷第一百五十五
右經卷者相樂郡岡田国神社奉収而
天下泰平国家安全祈可乎也
嘉祿元年乙酉 六月十七日 聖錄顯
至延享三年凡五百廿三年

上 第 155 卷 奧書、下 第 482 卷 奧書